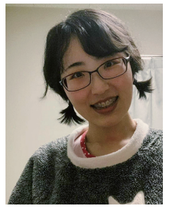
● シリーズ　私の見た日本　Vol.225

「住む」ことからみる日本



鍾 堯（ショウ ギョウ）

2015年合肥工業大学建築学専攻を卒業後、来日。日本語学校に入り、2017年信州大学入学、2019年同大学修了。現在、同じ研究室で博士課程に進学し、学位取得のため研究中

日本での生活

私は2015年の夏に日本に来ました。到着後、東京でしばらく日本語を学んでいました。その間、他の留学生2、3人と一緒にアパートに住んでいました。このアパートは6階建てで、各階に7つの2DKの部屋がありました。部屋の広さはどれもあまり広くなく、2つの寝室のうち1つは伝統的な畳が敷かれ、もう1つはリビングと同じ木製のフローリングでした。2つの寝室の間には、和紙でできた引き戸があり、後にそれが日本の伝統的な障子だと知りました。親切な大家さんが、畳の部屋にもプラスチック製と思われるマットを敷いてくれたので、畳に慣れていない私たちもベッドを置くことができました。暑い夏の日、部屋には常に畳独特の香りが漂っていて、もし私たちの世代にとって夏の共通の記憶がスイカの香りだとすれば、日本人にとっての夏は畳の香りなのではないかと思いました。

日本のアパートは通常狭いですが、コンパクトな間取りで空間がしっかり区分され、限られたスペースを十分に活用しています。それにもかかわらず、狭い空間の中でも、障子や畳、床の間、日本の伝統的な建築要素が取り入れられているのが見られます。

このような現代と伝統の融合は、建物の内部だけでなく、東京でも高層ビルの間に隠れるように佇む神社や寺院、文化財として保存された古い民家と出合うことがよくあります（写真1）。鋼鉄で作られた現代都市の中で、このような伝統建築は一層静寂に感じられます。ある時、道に迷った際、緑に覆われた庭を発見しました。塀を越えて中には伝統的な和風建築の屋根が見え、門の前にはチケット売り場がありました。近づいてみると、それは明治時代の女性作家の旧宅で、現在は有形文化財として保存されている場所でした。私はチケットを買って中に入って見学しました。この建物は、まるで作家がまだ生きているかのように良い状態で保存されていました。

日本の古い民家は中国の古建築と見た目が似ていますが、中国人にとっては一目で日本の建物だと分かる独特な特徴があります。それはおそらく建築の「気質」の違いではないかとその時に思いました。こうした現代と伝統の融合は、人々の衣装にも見られます。東京の繁華街や電車の中では、伝統的な和服や下駄を履いた人々と、スーツに身を包んだサラリーマンが対照的な光景を作り出しています。

東京の街を歩いていると、建物の密度の高さに驚かされることがよくあります。2つのビルの間の距離は通常数メートルしかありません。私が住んでいたアパートの寝室には南向きの窓がありましたが、その窓の1.5メートル先には隣のアパートの窓がありました。夕方になると、その窓から他のアパートの住人が話している声がよく聞こえてきました。後に日本語が少し分かるようになってから、それが家族を夕食に呼ぶお母さんの声だと分かりました。

現代住宅建築の発展

中国では、都市化の進展に伴い、都市の居住環境が大きく変化しました。大量の高層住宅や分譲マンションが都市部で主要な居住形態となっています。都市住民は通常、密集した高層ビルに住んでいます。このような居住形態は、土地利用効率を向上させる一方で、狭い空間やコミュニティ関係の希薄化といった問題も生じさせています。これらの住宅は、標準化された間取り設計が採用され、機能が明確に分かれており、家庭内のプライバシーが重視されています。

日本と比べて、中国の伝統建築は主に歴史的な遺跡や観光地として保存されていますが、現代の都市においては伝統建築の実際の利用は徐々に減少しています。いくつかの古建築は修復されて保護されていますが、

写真1　現代建築に囲まれた神社

写真2　徽派建築の天井（吹き抜け）　四水帰堂

写真3　私の故郷

写真4　古民家の再利用（須坂市 ふれあい館しらふじ）

写真5　京都の街並み

実際の生活では現代建築が大部分を占め、伝統建築の形式はほとんど見られなくなっています。中国の伝統住宅である四合院や徽派建築は現代住宅の中で次第に姿を消しましたが、近年では文化復興と伝統的な建築の価値再評価が進む中で、中庭や天井（中国では、吹き抜けを意味する。例えば:四水帰堂）のようなデザインを取り入れた新中式住宅が見られるようになり、自然光や通風を再導入することで、居住環境をより快適で心地よいものにしています（写真2）。

中国では、都市開発の過程で一部地域の建物をすべて取り壊して再開発するという方法が多く採られています。私の故郷の一例を挙げると、日本に留学してから2年後、久しぶりに正月を過ごすために帰省した時、地元で迷子になってしまいました。子供の頃に慣れ親しんだ街並みや家屋はすべて高層住宅に取り替わっていました。家から遠くない場所に小さな山があり、子供の頃によくその山で遊びましたが、今では平らにされ、高層マンションが建ち並ぶ住宅地になってしまいました。もし故郷の環境がすべて変わり、記憶を支える物理的な基盤が失われたならば、それはまだ故郷と呼べるのでしょうか（写真3）。

私は、日本のように現代生活の中で多くの伝統的建築を修復して使い続けることが、文化の継承にとって有利であると思います（写真4）。たとえば、京都や奈良などの地域では、古い町屋や伝統的な神社が今でも日常生活で使用されており、伝統建築と現代生活がシームレスに結びついています（写真5）。多くの家庭では、畳の部屋や日本の伝統的な庭園を維持しており、これらの日常的な実践を通じて伝統建築文化が継承されています。

伝統的な文化の影響

中国と日本の居住環境は、両国の伝統文化に大きく影響されています。中国は歴史的に農耕社会であり、複数世代が同居する居住形態が長い間で主流でした。伝統的な四合院や三合院などの住宅形式は、家族間の緊密な関係や階級秩序を反映しています。このような建築レイアウトは中軸線を中心に四方を囲む形で、閉鎖的で内向きの空間を形成し、プライバシーを確保するとともに大家族の共同生活のニーズにも応えています。

日本の伝統住宅の空間レイアウトは、より柔軟で多様であり、空間の多機能性と開放性を重視しています。日本の住宅には固定された機能エリアがなく、室内の空間は移動できる引き戸や障子で仕切られ、必要に応じて空間の用途が調整されます。例えば、昼間はリビングとして使用される部屋が、夜には寝室に変わります。このような空間の柔軟性は、現代建築のデザインにも反映されています。日本の伝統住宅の美学は、より簡素で自然志向です。日式住宅の内部装飾は非常にシンプルで、空間の「余白」と自然素材の質感を強調しています。庭園デザインには枯山水や石灯籠などの要素がよく見られ、「侘び・寂び」の美学観念が表現されています。これは、完璧でないものや簡素なものを通じて、深層的な美しさを表現する考え方と言われます。

中国の伝統的な住宅建築は、主に木材やレンガ、瓦を使用しており、構造がしっかりしているだけでなく、装飾も細部にまでこだわっています。四合院の屋根は瓦で覆われ、風や雨を防ぐ機能を持ちながら、軒の反り返ったデザインは中国伝統建築の独特な美学を反映しています。中国住宅の木造構造は、しばしば彫刻や彩色と組み合わせられ、人々の理想的な居住環境に対する美的要求を反映しています。

日本の伝統的な住宅も木材を主要な素材としていますが、視覚的にはより繊細に見えます。これは、日本は地震が多い国であり、設計上では伝統的な住宅がより軽量で柔軟性を重視しているためかもしれません。また、日式住宅には紙質の材料が多く使われており、例えば障子戸は、コストを抑えるだけでなく、空間の透明感と光の柔らかさを増加させています。